

平成 28 年度 石巻好文館高校舎改築設計公募型プロポーザル審査講評

【第 2 段階審査の経過】

第 1 段階審査を通過した 5 社によるプレゼンテーション（ヒアリング）の後、審査を行った。まず、各社の技術提案書の表現等が実施要領に沿ったものかどうかを確認し、いずれも要領に抵触するものではないことを確認し審査を進めることを決めた。

各委員による投票に入る前に、各社の技術提案書の内容についてあらためて特徴や課題などを順に意見交換して確認した後に投票に移った。投票は記名とし、あらかじめ設定された評価項目ごとに 5 段階の評価点数を記入、全員が記入後、事務局で回収、各項目の配点に応じた配分と集計を行った。第 1 段階での評価点（満点 30 点）はそのまま持ち越し、第 2 段階（技術提案書・ヒアリング）の評価点（満点 70 点）とあわせて 100 点満点で総計点をまとめた。また、参考資料として各委員による事務所別の評価点も示された。

その結果、E 社が 90.1 点、B 社が 82.5 点、A 社が 81.0 点、D 社が 71.4 点、C 社が 56.0 点となった。委員別では、E 社に最高得点を付けた委員が 4 名（うち、1 名は A 社と同点）D 社に最高得点を付けた委員が 1 名となった。E 社と総合的な評価が次点の B 社との比較を行ったが、総合的に E 社の評価が高かったことから、当初の審査結果の評価点にもとづいて選定することの妥当性を確認し、全員一致で E 社を設計候補者とした。また B 社を次点候補者として選定することとした。

今回、2 段階評価（プレゼンテーション・ヒアリング）に臨んだ各社の提案は、仮設校舎の有無、校舎改築のプロセス、将来的な配置計画、単位制高校のプログラムなど非常に複雑な課題条件を真摯に読み解き提案された各社の姿勢に対し、判定委員一同敬意を表し、感謝を申し上げたい。

【選定結果及び講評】

設計候補者：株式会社 佐藤総合計画（E 社）

取組体制や業務の進め方、各課題に対する提案において、総合的な観点から最も優れた提案と評価された。

新設校舎を現校舎に近い配置とし、北側に低層の選択教室群の校舎を配置し、キャンパスモールを設け吹き抜けのある豊かな空間を創出している。単位制プログラムに対しては管理部門、特別教室部門、普通教室部門、選択教室部門と明快なゾーニングを行うことで、空間のわかりやすさと移動動線のコンパクト化を感じさせる計画となっている。また仮設校舎を用いない配置計画と設計期間の短縮を図る工程計画に加えて、一部 S 造を用いることで構造計画上の杭の減少化など、事業費全体のコストダウンの提案についても評価を集め、提案者の意欲的な姿勢とともに、幅広く意見を聞く姿勢とそれらの意見を計画に反映

させる実行力のバランスなどが高く評価された。

以上から、本事業の設計業務を委ねるに最もふさわしい設計者として選定した。

最後に、隣接住宅と北側の校舎の関係、新校舎建設時の既存校舎の生活環境、様々なステークホルダーとの対話型の設計プロセスなど、今後計画を進める上で想定される課題に対して、できる限り丁寧に対応していただき、伝統ある石巻好文館高校の新たな歴史を生み出す環境を今後の計画の中で丁寧に具体化を進めることを委員会としての希望を添えて最優秀選定の評とする。

次点：株式会社 大建設計（B社）

仮設校舎の有無の検討、将来計画を見据え敷地全体をとらえたバランスの良い提案と評価された。特に様々なケースを想定した丁寧な分析は高い評価を得られた。また、コンパクトな建築計画により、移動動線の集約化、図書を中心とした吹き抜け空間を設けることで、生徒のアクティビティが俯瞰できる環境は一定の評価を集めた。最優秀との比較において、議論になったのは将来計画の前提となる既存体育館の扱いである。既存の体育館の再配置が現時点では、築20年程度と未定の状況が多く、新校舎の南側前面に既存体育館が立地することによる懸念が示された。学習環境、教室などの平面計画と空間構成がやや単調なことから単位制高校の多様なカリキュラムへの対応などが課題として残るとの意見などがみられた。以上の点などを踏まえ、最終的にはE社案との比較の結果、次点となった。

平成29年2月21日

平成28年度 石巻好文館高校舎改築設計

公募型プロポーザル判定委員会

会長 坂口 大洋